工事誌編集の先駆け

『小河内ダム工事誌』誕生の思い出

藤波哲二*

土木学会誌編集委員会から今回の特集にあたって標題の『小河内ダム工事誌』について，出版までの苦労話やその後土木界に与えた影響などを書いてもらいたいとのお話を受け，あえて筆をとった次第である．私もこの工事に携わった者の一人として，『小河内ダム工事誌』が関係者一同の土と血と汗と涙の結晶であり，日本土木史の一頁を飾るものとして今回の特集に取り上げられたことに感謝している．また，これが工事誌の一つのパターンをつくったことや，まだこれに優るものがあまり出ていないなどお賞めの言葉をいただき，ついその気になって書いたもので，冒頭にお断わりしておきたい．

小河内ダムが完成して早くも来年は 20 周年を迎えることとなった．この小河内ダムは都民の飲料水を確保するため，東京都水道局が独力で多摩川上流に水道専用ダムを築造したもので，現在は奥多摩湖として秩父多摩国立公園の一角にその偉容をたたえている．小河内ダムは日本が誇るダムの一つとして，また，水道専用では世界最大のダムとして，そして，この計画が始まってから完成するまでに 25 年の歳月を要したことなどにより，まだ記憶に新しいものであろう．すなわち，その建設の歴史は古く，昭和7年，当時の東京都西多摩郡小河内村（現在の奥多摩町）において多摩川本流を高さ 149 m の巨大なダムでせき止め，山梨県にもまたがる大貯水池を建設して，都民の水を確保しようとする東京市第二水道拡張計画が東京市議会で決議されたことによる．その後，水没することとなった小河内村民の補償問題，水利権をめぐる神奈川県との係争問題，第二次大戦による工事中断など多くの曲折を経てきた．当時，作家石川達三が湖底に沈む運命となった小河内村を小説『日蔭の村』で取り上げ，また，東海林太郎の唄う哀調のメロディー「湖底の故郷」が盛んに歌われていた．戦後に至って昭和 23 年に工事は再開され，長い歳月と関係者の非常な努力によって昭和 32 年 11 月にようやく完成し，貯水量 1 億 8 000 万 m^3 の小河内貯水池が誕生したのである．

この工事誌はすでにお読みになった方もおられると思うが，本編と図編に分冊して，一つの函に収めたもので，本編は 28 章・678 頁・写真 233 枚からなり，図編は 107 枚の工事図面を折りたたんで製本してある．内容は計画・設計・施工の実際から，労災・補償・工事費内訳に至るまで詳細に記述されており，最後に工事仕様書，アメリカ合衆国内務省開拓局 J.L. Savage 博士（当学会名誉会員で故人）らの助言を付記している．

このように，小河内ダムの建設には，戦前・戦後にまたがった長い歳月を要したことから，この間の記録をま

小河内ダムの諸元

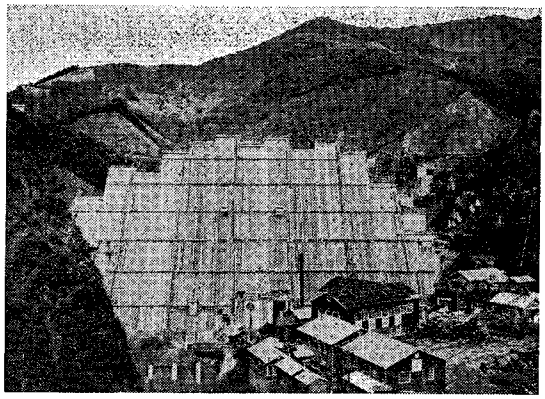
形式	非越流型直線重力式コンクリートダム	有効貯水量	1億8540万 m^3
		流域面積	262.88 km^2
高さ	149 m	満水面積	4.25 km^2
頂長	353 m	満水周長	45.37 km
敷幅	131.2 m	満水延長	13.87 km

* 前東京都水道局利根川水道建設本部長

とめるにあたって，計画の経緯や補償問題，水利権に関する交渉経過など戦前の記録と，小河内ダムの設計・施工に関する戦後の記録とに分けて編集するという方針にたち，戦前編は小河内ダムの計画者で初代建設事務所長でもあった小野基樹氏に執筆を依頼し，これが別冊の『東京都第二水道拡張事業誌前編』となっている．したがって，この『小河内ダム工事誌』は，主としてダム建設記録の技術編ともいえるものであるが，この編集にあたっては，ダムが完成する半年ほど前に当時の佐藤志郎所長，藤田博愛技術部長が中心となって小河内ダム工事記録編集委員会を設け，将来のダム建設に参考となるよう図面やデータをできるだけ多く収録するなどの編集方針のもとに大略の目次と執筆担当者を決めた．これらの担当者は15名程度とし，ダムの設計，骨材生産，基礎グラウチング，コンクリートの製造および試験，コンクリートの冷却，継手グラウチング，ダムに関する測定などの各部門の原稿執筆には直接担当した職員をあてた．幸いダム工事に着手してから竣工まで担当も変わらなかったことから，執筆者は各部門の内容に最も精通しており，データも保存されていた．一方，小河内ダム建設に関する報告文や論文を佐藤所長が『土木学会誌』に発表しており，さらに所内においても設計・施工の技術資料をそのつど小冊子にしてまとめていたので，これらの資料が記録をまとめるうえで役立つこととなった．しかし，締切予定日になっても原稿が集まらず，そのうち竣工式を迎え，やがて職員の大半は転勤のため山を下り当初5名であった編集委員も1名になってしまったが，藤田部長が熱心に原稿の収集に努力され，編集の灯も消えることなく作業は進んだ．その後，編集担当者を専属にあて，これを応援する係員をおいて，原稿整理・製本発注・校正にさらに2年を加えて，昭和35年6月待望の出版の運びとなった次第である．

われわれが戦後工事を再開してからこのような巨大なダムを築造する技術について，当時合衆国内務省開拓局（USBR）や合衆国陸軍工兵隊（Corps of Engineers）の工事報告書（Final Report）が唯一の資料であり，杉田玄白の『解体新書』のように一字一句を吟味しながら，ともかく日本的な設計施工方針を定めていくのに非常に役立ったことから，当時の電源開発ブームにあって，小河内ダム建設の技術が今後の日本のダム建設にいささかでも役に立てばという理念からもダム工事誌にまとめておく必要があった．

この工事誌が，後日，日本のダム技術の礎（いしずえ）となっていると自負しているが，現在も各種工事誌の編集用テキストとして重宝がられていると聞き，まことに幸いなことである．なお，将来，ダムの設計に利用しうるように小河内ダムにはダムに関する各種測定設備を設けたが，現在でも測定記録を毎年『管理年報』にまとめており，これによると設計した条件に近いデータを示していることを付記しておく．



完成間近かいの小河内ダム（130万 m³ 打設，昭和31年5月）

あいにくとこの種の本は非売品であって，土木学会を始め関係各方面に寄贈はしているが，一般の方の目にとまりにくく蔭にかくれた存在である．

現在も大規模な事業が全国各所で行われており，土木学会でも積極的に工事誌の出版に協力されておられるが全事業に協力することは至難の業である．そこで，事業者としては工事の完成とともに必ず Final Report をまとめるよう心掛け，日本土木史の一片として残されることを希望する．そのためには，特に事業当初より工事誌編集のことを念頭においてスタートすべきであり，そのための組織・責務などを明確にして資料・写真等の整備に心掛けるべきであろう．すでに多くの事業体ではこの方法によって実施されているとも聞き，まことに結構なことと思う．それとともに，出版の時期も早いに越したことはないが，忘れられたころ出版してもその効果は半減するので，そのためにも編集計画は綿密に組んでおく必要があろう．また，工事誌の出版によってすべてが完了することなく，これを維持管理する過程で各種の観測調査を行い，それを集大成し設計施工に反映させてこそ真の意義もあることから，工事誌の発行とともに管理報告書の編集もぜひ計画しておく必要があると考える．

「夕陽は赤き　身はかなし
　なみだは厚く　ほほぬらす
さらば湖底の　わが村よ
　おさなき夢の　ゆりかごよ」

これは，前述の『湖底の故郷』の一節である．工事誌を編集するにあたって，技術上の記述にとどまらず，工事に伴い移転を余儀なくされた人びとのことも記述しておく必要もあるのではなかろうか？　これによって，工事誌が一段と重みをますものとなると思われる．終わりに工事途中に殉職された87名の方々の冥福を祈り，筆をおく．